

アフガンで井戸を掘る

講演 中村 哲(医師)

司会 青木裕司(世界史講師)

中村さんにはすでに20年間近くにわたって河合塾福岡校などで講演をしていただいている。首都圏では1995年以来である。たまたま日本での滞在期間と調整がとれ、実施となった。中村さんは相変わらず淡々と、時折ユーモアを交えて語り、それがかえって真実の重みとして参加者に伝わったようだ。立ち見の満員400名を越す参加者からは講演後次々と質問の手が上がり、内容も鋭く、濃かった。自分の感動をうまく表現できないもどかしさが見え隠れするその顔は、とても印象的だった。なお、講演直後の6月に、NHK番組「知るを楽しむ—この人この世界」で、中村さんが出演した「アフガニスタン 命の水を求めて」が放映された。

参加者の声

- ・国際協力というところごく意気込んで取り組まなければならないような気がしますが、純粋にそばにいる人を助けたいという思いがとても大切なのだと感じました。大義名分なんていらないうですね。(文系女性)
- ・中村先生は人間として本質的な生き方をしてこられたのだと思いました。人間として一番大切なことは、地位や財産といったことではなく、人の幸福を常に考えて前進し続けることなのだとわかりました。(文系男性)
- ・「誰もやらないなら我々がやる」という言葉が印象に残りました。こういう発想をする人がいるから世界は成り立っているという気もしました。(文系男性)
- ・まさか河合塾で実際にお話がうかがえるとは思っていませんでした。感動しました。将来医者として、一人の人間として何をなすべきか。自己満足ではない国際貢献はとても敷居が高いように感じていましたが、非常に親しみやすい先生のお話で、勇気をもらいました。頑張ろうと思いました。(理系男性)
- ・最後の質問で、子どもたちが危険にさらされながらも笑顔を持ち続けている理由として「生きていること」「家族と暮らせていること」が大切であり、そのことの前では小さなストレスなど問題にならないというお話をさせていただき、「『生きる』とはどういうことか、私たちが考え直さないといけない」と思いました。(一般女性)
- ・内容については今すぐにはまとまりそうもありません。こんなにいろいろ考え、感情がわき起こったのはとても久しぶりです。でも何よりも、とにかく「すごい人」だと思います。中村さんというその人に興味がとてもわきました。(文系女性)

河合塾エンリッチ講座

2006



アフガンで井戸を掘る

講演 中村 哲(医師)

司会 青木裕司(世界史講師)

東京での仕事を終え、本屋に立ち寄ったら、中村哲さんの本を見つけた。「アフガニスタンで考える—国際貢献と憲法九条」(岩波ブックレット)、2006年4月発行)。帰りの飛行機の中でそれを読んでいたら、無性に中村さんの顔を見たくなった。そして、中村さんの声を聞きたくなった。これが今回の講演会を提起することになった「動機」だ。

私の「フランチャイズ」である福岡校では、1988年から、すでに10回近く「報告」というかたちで中村さんの話を聞く機会を持ってきた。現地の人々と共生しながら地道な活動。はた目から見ててもご苦労の多い大変なことをやっていたら、いっしょなのに、全然肩に力が入っていない風がない。いつも淡々と、そして静かに、自らの経験を語られるのだ。私は、いつもそのことに、整理のつかない感動を覚えた。

圧巻だったのは、2001年9月23日。「9.11テロ」のあと、アメリカはアフガンのタリバン政権をテロの「黒幕」として、攻撃の準備を進めていた。その緊迫する情勢の中、たまたま帰国された中村さんを我々はキャッチすることができた。そして福岡校で緊急講演会を催した。

その日は朝から一般市民の電話が河合塾福岡校に殺到した。「河合塾とは関係ないんですけど、参加していいですか」「予備校生じゃないんです

が、是非お話を聞きたくて…。」…こうして1500人の学生・市民が集まった。

そして中村さんの話。あいかわらず(?)淡々と、そしてときに独特のユーモアをまじえて(これがまた、たまらないんだ!)、アフガンの現状を語る中村さん。

我々に入ってくる情報は、欧米や日本のマスメディアを通じて、あるいは「近代欧米の価値観」とおしてのものが多い。一方中村さんが語る経験は、常に攻撃される側から、そして現地の人々と同じ地平からのものだ。結論を言おう。全然違うのだ。ふだん我々が接しているものとは!

この文章を書いている今も、アフガンでは多くの人が、戦乱、飢饉、そして病気で苦しみ、死んでいく。しかし、その一方で、中村さんたちが掘った井戸や用水路で、「生」を確保している人々が増えつつあるのも事実だ。講演では、そこで掘られた素晴らしい写真も紹介される。ひどい状況の中にあっても、笑顔で生きているアフガンの人々の表情は(とくに子どもたちのそれは)、本当に素晴らしい。

講演の提案者として、1人でも多くの学生・教職員、そして市民の方々が池袋校に参集されることを訴えたいと思います。

世界史科講師 青木裕司

●中村 哲(なかむら てる)

1946年福岡生まれ。医師。ベトナム・金地代表。九州大学医学部卒業。日本国内での診療経験の後、84年、パキスタンのベシヤールに赴任。以来、ハンセン病のコントロールを中心とした難民医療に携わる。86年にはアフガン難民のための医療チームを設立。長期展望にたつた、無医地域での診療活動を開始。91年からは、アフガン東部山岳地帯3カ所に診療所を設立し、診療をおこなう。貧困層への医療活動をおこなうと同時に、水源地保護事業も展開。井戸の掘削とカレース地下水路の復旧を続ける。1989年河合塾福岡校での講演記録「ベシヤールからの報告—現地医療現場で考える」は河合ブックレットとして河合出版から発行された。
著書:『ベシヤールにて』(国は重境を越えて)「医者井戸を掘る」(辺境で診る 辺境から見る)「空と地復興」以上、石風社、「アフガニスタンで考える—国際貢献と憲法九条」(岩波書店ほか多数)。



5月20日(土) 18:00~
池袋校 西校舎 5A教室

入場無料
申込不要

〒171-0021 豊島区池袋1-3-12
☎0120-198-630
●JR・西武池袋線・東武東上線・東京メトロ丸の内線・有楽町線/池袋駅下車メトロポリタン口徒歩1分

